呪われたもの

ありま氷炎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
呪われたもの

【Ｎコード】
Ｎ７５９６Ｘ

【作者名】
ありま氷炎

【あらすじ】
女性呪術師の藍（ラン）は２年ぶりに師匠で呪術司の典（テン）を助けるため、宮に戻る。典（テン）と帝は救ったものの自分自身に呪いがかかり、絶世の美女になってしまう。美女から元の姿に戻るため、藍（ラン）の冒険が始まる。気まぐれ連載です。ブログと同時更新。

2年ぶりに宮へ

「はあ…」
呪術師・藍（ラン）は本日何度目かのため息をつく。
そして茶色の布袋に衣服など詰めていく。

決めたことだ。
呪術部―宮を出る。

呪術部で習うべきことはすべて習得した。
この場所に未練はない。

藍（ラン）は15歳のときにその呪術の腕を見込まれ、宮にある呪術部に入った。
呪術とは自らの気を操り、相手を呪いかける術であり、気を使い相手を物理的に攻撃もできる戦闘にも長ける術だった。
有能な呪術師は宮にきて更に修行を積み、帝を呪いから守り、国の運営に力を貸すため、宮の呪術部に集められた。宮においてその地位は華やかなもので、藍（ラン）の両親もそれを期待して藍（ラン）を宮に見送った。

藍（ラン）は茶色の真っ直ぐに伸びた髪を後ろで結び、意志の強そうな青い瞳を持った小柄な可愛らしい女性であった。しかし、他の女性呪術師のように着飾ることがなく、いつも同じ白地の着物に、青い羽織りをつけており、その可愛らしさに気づくものは少なかった。

「やっぱり行くのかい？」
呪術司の典（テン）は大きな布袋を背中に背負い、部屋を出て行こうとする藍（ラン）にそう声をかけた。

藍はまさか典がそこにいるとは思わず驚いた典を見つめる。
典は呪術部をつかさどる呪術司で、藍の師匠だった。宮の美しき呪術司を呼ばれており、整った卵型の顔に透き通るような緑色の瞳、見るものにため息をつかせるほどの美しい金色の髪は無造作に肩にかかるまで伸ばされていた。
藍は典の下で3年修行を積んだ。その優しげな容貌と異なり、指導は厳しく、3年のうち、集められた呪術師で残ったのは5人だった。
呪術師仲間と過ごすのは楽しかった。しかし藍は宮の生活が苦手だった。宮の人々は表の顔は美しいがその腹に抱えるのは醜い思いばかりだった。帝を呪いから守るのが呪術部の呪術師の主な仕事であったが、帝の元に集うものたちが己の欲望のために、呪術師に呪いを頼むものも多かった。
「申し訳ありません。田舎ものの私にはやはり宮の生活はむずかしいです」
藍はぺこりと頭を下げると部屋の入り口で、扉に寄りかかり、やさしげな笑みを浮かべる典の前を通りすぎようとした。
「藍！」
典はそう名を呼ぶと藍の腕をつかんだ。
「君がいなくなると仕事量が半端になく増えるんだ。いてくれないか？」
緑色の瞳は藍を捉えるとそう懇願した。
「……典様。部には私以外にも明様やたくさんの呪術者がいます。心配しなくても」
藍がそう答えると典はため息をもらす。
「君くらいの能力じゃないから、役にたたない」
役にたたないって。
あいかわらず容赦ない言葉だと思いながら、藍は典を見つめ返す。

「……典(テン)様。それを言ったら明様が怒りますよ」
すると典(テン)は苦笑する。
「正直なことをいったまでだ。私はただ美しいだけものよりも能力のある者が側にいたほうがいい」

すみませんね。美しくなくて。
でも、美しいだけって、明様が聞いたら泣きますよ。

「…典(テン)様」
藍(ラン)は苦しげな典(テン)を見つめ、その名を呼ぶ。
「藍(ラン)。お願いだ。行かないでくれ」

まったく、愛の告白みたいだ。
でもその手には乗りません。

典(テン)が必要なのは藍(ラン)のその力だということを藍(ラン)は十分にわかっていた。
典(テン)が誰かを好きなったり、いれ込んだりするのを見たことがなかった。

最初はその言葉に期待し、宮を出ていくをやめたりしたが、5回目となる今日は騙されるつもりはなかった。

「典(テン)様。がんばってください。私がいなくなればみんなちゃんと仕事をしますよ。きっと。だから大丈夫です。田舎から応援してますから」
呪術司に言う言葉じゃないと思いながらも、藍(ラン)は笑顔を作り、つかまれた手を振り払う。そしてくるりと典(テン)に背を向けると部屋を出て行く。

「藍(ラン)！」
「典(テン)様、お元気で～」
藍(ラン)はひらひらと手を振ると呪術部の建物を出て行った。
「藍(ラン)！」

「はい！」
そう勢いよく返事した自分の声で藍(ラン)は目を覚ました。そして自分が森の中で昼寝をしてしまったことに気づく。
宮から帰ってきて2年ほどたっていた。
「夢ぇ？」
村に帰ってきて初めてみた宮での夢だった。
「まさか、なんか典(テン)様にあったのかな？まさか、あの典(テン)様が…」
夢が暗示することもあるという言葉を典(テン)から聞いたことがあったが、無敵を誇る典(テン)が危機に陥るなど藍(ラン)には想像できないことだった。
「さあ、仕事、仕事！母さんに怒られる！」
藍(ラン)はうーんと背伸びをすると、店に戻るために勢いよく立ち上がった。

宮から村に帰ってから、両親が経営する呪術店を手伝った。さすが宮帰りということでその噂は広まり、両親がほそぼそとやっていた店はたちまち人気の店になった。店に押しかけるのは人に呪いをかけてほしい人や、呪いを防ぐ護身具を求める者たちだった。
「藍(ラン)、あんたどこいってたの～」
店の扉を開けに入ったとたん、母親がそう声をかけてきた。
「どこって…」
藍(ラン)は返事を返そうと顔を上げる。そして目の前に立ちふさがる男を見て目を疑った。
「……強(キョウ)様？！」
それは宮で警備兵をしていた強(キョウ)だった。強(キョウ)は典(テン)の親友でよく呪術

部に姿を現していた。そのため藍(ラン)も何度か強(キョウ)と会話したことがあったことを覚えていた。会話といっても典(テン)を介したものでどんな会話をしたのか覚えてないほど、実のある会話ではなかった。

強(キュウ)の姿は2年前と変わっていなかった。変わったといえば、鎧を着ていないことくらいだった。外出用の紫の着物を羽織り、褐色の肌に茶色の瞳、後ろの方でまとめた長い黒髪は藍(ラン)の母でなくともうっとりするような男前であった。

「藍(ラン)。お前、この人と知り合いだったの？店で待たせてくれと言われてどうしたものかとおもってたんだけど」

藍(ラン)の母はそう言いながら驚いた顔をしている藍(ラン)と渋い顔をして店の真ん中に立つ強(キョウ)を見比べる。強(キョウ)から藍(ラン)とは顔見知りで、急ぎの用があるから店で待たせたほしいといわれ、とりあえず店内で待ってもらっていた。戻ってきた娘の様子をみて半信半疑の母親だったが納得した。

「藍(ラン)殿。久々だな。だかすまない。挨拶してる時間がないんだ。典(テン)が…呪術司が呼んでる。緊急だ。悪いが一緒に来てくれ」

「……緊急って？」

強(キョウ)の切羽詰った顔を見て、藍(ラン)は自分の心臓が跳ね上がるのがわかった。そして夢を思いだす。

やっぱり典(テン)様に何かあったんだ。

「今はいえない。とりあえず一緒にきてくれ」

強(キョウ)にそう言われ、藍(ラン)は仕方なくうなずき、強(キョウ)とともに宮に向かうことになった。

かけられた呪い

藍が住む国は帝が支配する国であった。
帝が暮らす宮京を中心に国を四つに分け、支配していた。４つの地区はそれぞれ北は紅花国、東は緑森国、西は碧雲国で、南は黄土国と呼ばれていた。藍の実家は北の紅花国であった。
宮の強力な軍事力、呪術部のため、内乱が起きることなく国は平和に保たれていた。

しかしふいにその平和は破られた。
帝に呪いの攻撃が加えられた。通常の呪いは宮に張った結界や、典の力で弾くことができた。しかし、典の力をもってしてもその呪いは強力で跳ね返すことができなかった。そして今典は持てる力すべてを使い、呪いから帝を守っている状態であった。典がその場を動けば守りの効果消える。しかし呪いが消える気配はなかった。そこで典が強に頼んだことは藍を宮に連れて来ることだった。

「なんで私なんですか？」
強の背中に掴まりながら、藍がそう尋ねる。強は馬を飛ばして宮から離れたこの紅花国にきていた。
「他の者じゃ対処できなかった。典はもう君以外に頼めるものがいないと言っていた」
強は手綱をつかみ、馬を走らせながらそう淡々と答える。

私が最後の希望か…

呪い返し、典と共に何度かやったことがあった。
典が呪いを食い止めてる間に、その気を消滅させる。

確かに他の者ではむずかしいかもしれなかった。

「でも最近、呪い返しの大きい奴はしてないんですけど…」

「悪いが君に選択肢はない。典(テン)だけでなく、帝の命もかかっているのだ」

「じゃあ、飛んでいきましょうか？」

「？」

ふいに言われた言葉に強(キョウ)はぎょっとして馬を止める。

藍(ラン)は馬からぽんと降りると、馬の上の強(キョウ)を見上げる。

「馬で宮に向かえば、2刻かかります。飛んでいけば半刻でつくと思います」

「…そうか」

強(キョウ)はそう答えながら馬から降りた。

正直、典(テン)が飛んだ姿はみたことがあったが、自分が飛ぶとなると違った。

「強(キョウ)様とあるものが怖いんですか？」

藍(ラン)は強(キョウ)の顔が強張ったのを見て思わずそう尋ねる。強(キョウ)は勇敢なる戦士として宮で一目置かれていた。その強(キョウ)がそんな顔をするのがおかしかった。

「…そんなことはない」

「じゃ、手を貸して下さい。馬はすみません。あきらめてください」

藍(ラン)の意志の強そうな青い瞳を向けられ、強(キョウ)は仕方なく手を差し出す。藍(ラン)は手を掴むと何も言わず飛び上がった。

「？！」

浮遊感が体を包み、強(キョウ)は自分の顔が青ざめるのがわかった。

「怖がらないでください」

「怖くなどない」

藍(ラン)は強(キョウ)の答えに思わず笑みを浮かべる。

「何がおかしい？」

「いや、別に…。さ、強(キョウ)様、飛ばしますよ。典(テン)様といえ、早くしな

いと大変なことになりますから」

「典(テン)、大丈夫か？」

帝は寝室から体を起こし心配気に典(テン)を見上げる。

「大丈夫です」

典(テン)は脂汗をかきながらそう答えた。

実際のところ大丈夫ではなかった。辛うじて帝に呪いが届く前に止めることができたが、呪いが意外に強力で弾き飛ばすことができなかった。

呪術部から何名かの呪術者が来たが、典(テン)の助けになることはなかった。

そこで浮かんだのが、2年前に宮を出て行った藍(ラン)だった。

可愛らしい女性でその姿に似合わず、甘えのないその気は典(テン)を唸らせることもよくあった。

宮を出るというのを何度もひきとめたが、とうとう2年前に出て行ってしまった。

この2年大きな呪いが宮を襲うことはなく、典(テン)は藍(ラン)の助けを必要としなかった。

しかし、今回はどうしても藍(ラン)の助けが必要そうだった。

強(キョウ)に頼み、藍(ラン)を連れて来るように言って3刻が立とうとしていた。

体がきしみ始め、呪いを弾く結界が崩れ始めようとしていた。

まずいな…

帝に不安を与えないように笑顔を作りながら、内心、典(テン)は焦っていた。

「典(テン)様！」

ひさびさに聞いた元気な声に典(テン)はほっとするのがわかった。

「何者だ！」

窓からふいに入ってきた藍(ラン)を見て声を荒げた警備兵だが、側に隊長の強(キョウ)の姿を確認して構えた剣を降ろした。

「藍(ラン)、来てくれたんだ。ありがとう」

「どういたしまして」

藍(ラン)はぺこりと典(テン)に頭を下げた後、奥にいる男に気づいた。

黒髪に黒い瞳、真っ白の肌の華奢は男がベッドの上に座っていた。

その場所、色彩から帝であることがわかる。

寝室には帝と典(テン)のほか、数人の警備兵がいた。強(キョウ)は船酔いではなく、飛び酔いになったようで、顔色を悪くし、警備兵と共に壁に控えていた。

「帝様、紅花国の藍(ラン)です」

藍(ラン)はとりあえず典(テン)の横から顔を出し、寝台の帝に対し頭を垂れる。

「ごくろうである。宮から出たというのにすまないな」

帝は藍(ラン)を見ると微笑みを浮かべた。

「そんなこと、恐れ多いです」

帝にそう言われ藍(ラン)はふかぶかと頭を下げた。

帝さんって悪い人じゃなさそうだ。

ま、悪かったら国が滅んでるか。

藍(ラン)はそんなことを考えていると声がかかった。

「藍(ラン)。悪いけど、呪いを先に返して貰ってもいいかい？」

「そうでしたね。じゃあやります」

藍(ラン)は帝に再度頭を下げると、典(テン)に視線を向けた。その手に真っ黒は気が絡みついていた。
「かなり強力そうですね」
「それはそうだ。この私がはじけ飛ばせないんだから」
「そうですね」
やっぱり偉そうな人だなと思いながら、藍(ラン)は心を落ちつける。
そして手の平に気を貯め始める。
「いきます！」
気をためたところでそう声をかけ、その黒い気に自分の気をぶつける。

衝撃音がし、光が弾ける。
典(テン)は黒い気から解放され、ほっとその場に座り込む。
しかし、煙から現れた藍(ラン)の姿をみて、目を見開いた。
「……藍(ラン)。残念ながら呪いにかかってしまったようだよ」
典(テン)の言葉と視線に藍(ラン)は自分の姿を確認する。そして、自分が別の姿、別の女性になっていることに気づいた。

「え？元に戻る方法？どうして？」
典(テン)はにこにこ笑ってそう聞いた。
呪いを弾き、帝の安全がわかってから、典(テン)は再度結界を張り直した。そして藍(ラン)を連れ呪術部の呪術司部屋に戻ってきていた。
「どうしてって、こんな姿で村に帰れないですよ。戻す方法教えてください！」

「……いや。ご両親も喜ぶと思うよ。今なら国で一番の美女だと思うけど」
「！！」
藍（ラン）は典（テン）をぎろりと睨みつける。
典（テン）の言葉通り、変化した姿は、それはそれは美しい女性体だった。
青い瞳に波打つ金色の髪の毛、そして美しい肢体…
宮内を歩いて、呪術部に戻る途中、振り返らない者はいなかった。
そう確かに、国一番の美女かもしれない。
今なら…
でも、私はそんなものに興味はない。
鼻が低くても、目が小さくても、胸がなくても、前の姿の方がよかった。
「戻る方法教えてください！教えないと典（テン）様、私が全身全霊をかけて呪いますよ！」
藍（ラン）の言葉に典（テン）の顔が引きつる。
通常人に自分の名前の書体を教えてはいけない。
呪いに使われる可能性があるからだ。
しかし、典（テン）の名前の書体はあることがきっかけで藍（ラン）にばれていた。
「…しょうがないな。いいよ。教えてあげよう。多分この呪いは東の呪術師・賢（ケン）の仕業だ。あいつがしそうなことだ。多分私が防ぐと思って、かけてきたのだろう」
「北の呪術師・賢（ケン）…。その人に会えば、呪いを解いてもらえるんですね！」

「多分ね」
「多分ってなんですか！」
「彼は気まぐれだからね。もしかしたら代償を取られるかもしれない」
「代償？」
「一晩お付き合いするとか…」
「！嫌です！典様、一緒に行って頼んでください。お願いします！」
「だめだ。私は宮を出れない。あー強を連れていくといい。あいつならなんとか賢に頼めるかもしれない」
「強様？」
「そう」

そうして藍は帝の呪いを破壊した代償に自分にかかった呪いを解くために、強と共に東の呪術師・賢の元にいくことになった。

いざ、東の緑森国へ

「飛んでいきますよ」
「飛ぶのか？」
「怖いんですか？」
「怖くなどない」
顔を引きつらせてそう言う強に、藍は微笑みかけ手を差し出す。
強が空を飛ぶことが苦手なのはわかっていた。しかし、一刻もはやく元の姿に戻りたい藍は馬より、空を飛んでいくとことを選んだ。
「強様？」
手を握り返さない強に藍が首をかしげる。
すると強の顔がすこし赤らんだ気がした。

強様も男だもんね。

藍は以前の姿であればけしてありえない状況に心の中でため息をつく。
呪いにかかって数刻、絶世の美女になった藍への人々の態度は一気にかわった。男達はこぞって話しかけてきて、女性は遠巻きに藍を見ていた。
以前であれば用事がないかぎり、男性が藍に話しかけてくるなどありえなかった。女性は藍が自分たちの敵ではないと安心してるのか敵意のある視線でみることもなく、普通に話しかけてきていた。

まったく、たかが外見が変わっただけなのに。
絶対に早く元にもどってやる！

「ほらほら、強。見とれてないで」
藍がそう強い決心を固めていると、典が渋い顔をしてる藍とぼー

としてる強をニヤニヤと見比べてそう声をかけた。
「見とれてなどいない」
強は典の言葉にむっとして答える。
「はは。ま、強。とりあえず、中身は藍だから。襲ったらだめだよ」
「中身って！？」
「襲うだと？！なんてことを！」
「はいはい。そう図星だからって怒らない。急ぐんでしょ？」

図星って、
中身って、
やっぱり典様は口が悪すぎだ。
元の姿に戻ったら速攻、村に戻ってやる。

「そうです。急ぎますよ。強様行きますよ！」
藍はぎろりと典を睨みつけると強の手を掴む。そして一気に空に舞い上がった。
「藍殿？！」
強は突然、足場を失い、妙な浮遊感を感じで恐怖心で顔を歪める。思わず藍の腕を掴みたくなったが、それをどうにか男の沽券にかけて堪えた。
「強～。一応私の弟子だから、むらむらときても襲わないように」
「典！なんてことを言うんだ。お前は！」
「典様、言葉が過ぎますよ！」

なんてことを言うんだ。まったく。
藍は眼下に小さく見える典に鋭い視線を投げかける。
「はは。冗談だって。2人とも冗談通じないのかい？とりあえず気をつけていってらっしゃい」
「ああ」
「はい」

色々言いたいことはあったが、藍と強はにこにこと笑顔を浮かべて手を振る典にそう返事をするだけに留まった。
「じゃ、行きますよ！」
藍は強にそう声をかけるとその手を強く握った。
そして国一番の美女になった藍は強を連れ、東の呪術師・賢のいる緑森国に向かって飛んだ。

「強様、大丈夫ですか？」
緑森国に着き、地面に降り立つと強の顔は真っ青になっていた。
無敵の戦士といわれる強のそんな弱点をみて、藍はなんだか楽しくなるのがわかった。

やっぱり人間、苦手なものがあるもんね。
あ、でも典様にはなさそうだけど…

「大丈夫だ。賢の家に向かおう」
青ざめた顔のまま、そう答える強に同情しながらも藍はうなずく。
一刻もこの美女の姿から解放されたかった。
柔らかい肌、邪魔なくらい大きく胸、長い金髪の髪、普通であれば喜ぶ話なのだが、藍はこの美女姿が窮屈でたまらなかった。
強もどうしても意識してしまうらしく、飛んでるときも妙に緊張しているのを感じだ。
ま、襲われることはありえないと思うけど。

「藍。あの塔が賢の家だ」
緑森国の森の中を歩きながら、強が遠くに見える塔を指差す。
「結構遠そうですね。飛んでいきますか」
「…歩いて半刻もかからない。歩いていこう」
飛ぶという単語にぎょっとした強に藍は同情を覚え、北の呪術師・

賢(ケン)の家には歩いて向かうことにした。

「強(キョウ)様、賢(ケン)様とはどういうお知り合いなのですか」

『あいつならなんとか賢(ケン)に頼めるかもしれない』と典(テン)が言っていたので、藍(ラン)は2人がどういう関係か気になっていた。

「お知り合い…、賢は俺の兄だ。母親が違うがな」

「あ、兄?!」

意外な答えに藍(ラン)の声が上ずる。

でも兄なら、確実に元に戻してくれそうだ。

藍(ラン)は早くも元に戻れる可能性が高いことに気付き、嬉しくなって微笑む。

「強(キョウ)様、先を急ぎましょう」

「そうだな」

嬉しそうな藍(ラン)に強(キョウ)は少しだけ複雑な顔になったが、軽い足取りで前を歩く藍(ラン)の後を追った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7596x/

呪われたもの

2011年10月24日02時03分発行